

Tobu通信

鳥取県教育委員会事務局
 東部教育局
 〒680-0061鳥取市立川町六丁目176番地
 東教発 R 4. 1. 6 No.171
<https://www.pref.tottori.lg.jp/t-kyoiku/>

身に付けさせる力を明確にした授業改善に向けて 鳥取市立明徳小学校



明徳小学校では、令和元年度より算数を研究教科とし、学力向上の取組を進めています。令和2年度からは、敢えてTTや少人数指導を導入せず、担任がしっかりと児童と向き合い指導事項を身に付けさせる算数授業を実践しています。身に付けさせる資質・能力を把握する方法の一つとして、小学校算数単元到達度評価問題（以下「評価問題」という。）を活用した授業力向上に取り組み、今年度は、ICTを効果的に授業に取り入れる研究も並行して行っています。それらの取組のうち、評価問題を活用した授業改善と校内研修について紹介します。

【授業改善】

評価問題を活用した授業づくりのサイクル構築

PDCAサイクルにより、子どもたちに力を付けることはもちろん、指導者の授業力、教材研究の質を高める。

・問題と教材を見比べる。
 ・「どんな力が必要か」「適用題は？」など、職員室で自然に話し合いが始まる。



・深く考えさせる問題を参考にし、適用題に取り入れる。
 ・指導の実際、子どもの反応などを共有し、次時に向かう。

解き直しや家庭学習を通して、確実に身に付けさせる。

評価問題を実施し採点。採点基準について、自然と話題に上がり、意見交換が行われる。

【校内研修】

「この1問」のプレゼンを通して、教材の見方を養う

評価問題の中から担任が1問選び、身に付けさせる力を明確にした点、教材研究への役立て方、その結果などを共有し、授業改善につなげる。

同僚がどんな問題に着目し、それをどう分析して授業実践を行ったのか知り、実際に解いてみる。そうすることで、自分の指導を振り返ったり、評価問題を活用するメリットを実感できたりする。指導内容の系統性にも気付く。

「数直線図は大切。」
 「式だけでなく、図も必要。」
 「その子の考えやすい図で考えさせたい。」など活発に意見が交わされる。



学習指導要領で身に付けさせる力を知り、授業づくりに生かせる教材として、小学校算数単元到達度評価問題やB-PLAN、過去の調査問題、コバトン問題集などを活用する取組が、各学校に広がっています。また、全職員での取組は学力向上に加え、同僚性の構築や若手育成にも好影響を与えているようです。

絶対大丈夫

局長 長谷川 隆

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りします。

さて、昨年プロ野球日本一に輝いたヤクルトスワローズのファンの間などで、高津監督が選手たちに伝えた「絶対大丈夫」という言葉が話題となったと聞きました。ここ何年か下位の成績が続く中、今シーズンの終盤、優勝争いをしている選手たちが、苦しい場面でこの言葉を支えに戦ったということです。

学校は昨年も新型コロナウイルスの影響が大きく影を落としましたが、夏休み明け以降は徐々に状況が改善され、運動会や修学旅行など予定されていた学校行事も、様々な工夫をしつつ実施されたことと思います。しかし、新たな変異株の流行が懸念される状況もあり、「また同じように・・・」という不安やネガティブな気持ちになってしまいそうになります。

昨今、こういった先行きの見えない社会情勢や変化の大きな時代の中で、「絶対大丈夫」というような言葉がなかなか言い出しにくい世の中だと感じます。リスクマネジメントの観点からも、「世の中に絶対なんてない」と使われることのほうが多いのではないのでしょうか。今回のことも「結果が出たから取り上げられているのでは」と見る人もいるでしょう。

もちろん高津監督も簡単に使った言葉ではないと思います。共に戦っている選手たちの様子から、「やるべきことはしっかりやってきた。もっている力を発揮すれば道は開ける。」と信頼していたからこそその言葉だと思えます。そして選手たちも、きっとその言葉の力に背中を押されたのでしょう。

本年度も残り3ヶ月。こんな時代だからこそ、卒業や進級などで新たなチャレンジを始める子どもたちに、「絶対大丈夫」と背中を押してあげたいものです。

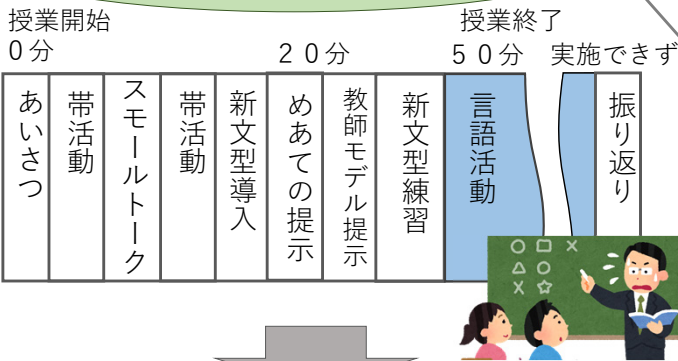
中学校 外国語

使いながら英語を身に付けられる授業づくり



今年度も東部地区の中学校・義務教育学校21校の英語の授業を参観させていただきました。内容が盛りだくさんの教科書を手に、様々な工夫を行いながら生徒に力を付けようと授業改善に取り組む先生方の姿がありました。一方で、「やるべきことが多すぎて授業が終わらない」「言語活動のやり方が正しいのかどうか不安」など、課題や悩みを打ち明けられる先生も多くありました。二つの授業パターン例を基に、使いながら英語を身に付けられる授業づくりのポイントを提案します。

課題の見える授業パターン例



[タイムマネジメント]

- めあての提示までに時間がかかる。
- 活動が多すぎて、振り返りができずに終了。

[言語活動]

- 何のための活動かが不明瞭。
- 会話の型が細かく示されており、自分で考え、自由に話す部分が少ない。
- 言語活動の途中に指導がない。

[全体を通して]

- 活動の説明は全て日本語。
- 小学校の学習と重複。
- ALTと生徒の自由なやりとりの時間がない。

授業づくりのポイント

①ゴールをめざした単元・授業設計を！

- ◇単元、授業の最終ゴールを生徒に提示・共有。
- ◇その時間で何ができるようになるのかを「めあて」として生徒に提示。

②考えや気持ちを伝え合う言語活動を！

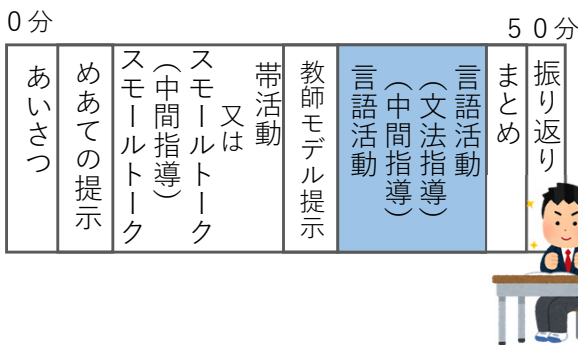
- ◇何のための活動かを明確に生徒に示す。
- ◇言語活動を行う時は、「活動→中間指導→活動」
- ◇活動前に示しすぎない、与えすぎない。

③断捨離で、活動をシンプルに！

- ◇本時のねらいに基づいて、活動を精選。



使いながら英語を身に付けられる 授業パターン例



『明日から使える言語活動 ワークショップ』実施

エキスパート教員の授業実践と解説の動画視聴とオンライン協議をセットにしたワークショップを実施しました。1回目は「スマールトーク」、2回目は「聞くこと、読むことの言語活動」をテーマにしました。動画視聴の感想を紹介します。

- ・生徒が悩みながらも一生懸命相手に英語で伝えようとする姿が印象的でした。
- ・中間指導の大切さを再確認することができました。
- ・話す楽しさを感じさせる授業づくりをしたいと思います。

動画視聴できます！

ワークショップの動画はtorikyoのGアカウントで下記のQRコードから視聴可能です。



英語を身に付けるには、教科書通り、会話の型通りの文章をなぞるだけでなく、既習事項を活用し、目的・場面・状況に応じて、自分で考えて発話する活動が必要です。内容や使用する表現に幅をもたせたスマールトークやメインの活動で、英語を使う楽しさを少しずつ体験することが意欲につながっていきます。そのためにも、「タイムマネジメント」「めあて・まとめ・振り返り」の質的な向上を意識していきましょう。また、このことは、中学校外国語だけでなく、小学校外国語活動・外国語の授業においても同じことが言えます。

特別支援教育
コーナー

「切れ目ない支援の実現」に向けた取組 ～年度末に向けて～

「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」は将来の自立と社会参加の実現に向け、一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援を展開していくための設計図です。年度末に向けてこの1年間の成長や効果的だった支援等を関係者で振り返り、設計図を見直す大事な時期になりました。次年度の学びに向けて指導目標や指導内容等を明確にするとともに、必要な支援等を設計図に記載して「見える化」し、関係者と確認する取組を充実させることが幼児期から学校卒業後までの一貫した支援の実現につながります。

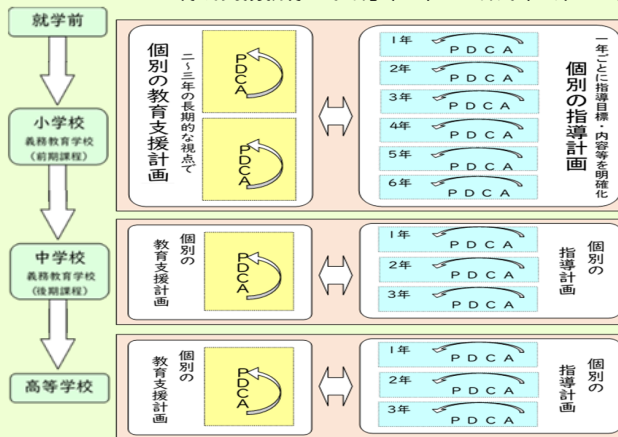
「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の評価及び改善と見直し

「個別の教育支援計画」を踏まえた「個別の指導計画」の充実

※「特別支援教育の手引」(P7)より引用(一部加工)

個別の教育支援計画

- ・できるだけ保護者、関係機関等参加のもと支援会議を開催し、目標等の評価を様々な側面から行います。
- ・指導後の変容に伴い、本人、保護者のニーズに変更がないか確認します。
- ・加筆・修正した記載内容について、必ず保護者に見ていただき、引き継ぐ内容や方法についても具体的に確認します。



個別の指導計画

- ・幼児児童生徒の変容を評価するだけでなく、指導者の指導・支援も評価します。
- ・内容を具体化し、複数で評価や見直しを行うとともに、教職員間での共有を図ります。
- ・個別の教育支援計画を踏まえた内容になっているか確認します。

手引(P7～)では、作成・活用のポイントが確認できます。

この2つの計画は、特別支援学級在籍児童生徒や通級による指導を受ける児童生徒に、必ず作成します。

「個別の指導計画」を保護者と共有する取組

園や通常の学級においても、学習上や生活上において困難さがあり教育的支援を必要とする幼児児童生徒について、学校生活全般における「個別の指導計画」の作成が進んでいます〔特別支援教育の手引(P72,73)参照〕。鳥取市内のある中学校では教職員間だけでなく保護者とも共有することで、指導・支援の成果を高め、進級・進学時に確実に引き継いでいく取組が始まっています。



保護者と共有する取組が始まった経緯を教えてください。

支援をしたいと考えても、保護者の理解が得られにくいケースがありました。

中学校
特別支援教育主任

「個別の指導計画」を使って見える形で学校の取組を共有することで、保護者と連携が取りやすくなると思いました。

「個別の指導計画」の作成にあたっては、懇談時に担任が作成の意図やメリットについて説明しています。通級による指導を利用している生徒は、通級担当者と保護者の三者で共有するようにしています。



共有することのメリットをさらに生かしていくために、内容の充実を図ることが今後の課題です。

「個別の指導計画」を保護者と共有することのメリット

【保護者】

- ・子どものよさや課題、学校での取組を具体的に共有できることで、安心感がもてる。
- ・宿題や課題提出など、家庭での取組に見通しがもて、困ったときに学校に相談しやすい。
- ・学校での取組や本人のがんばりを知ることで、家庭での声のかけ方に工夫ができ、ほめる場面も増える。

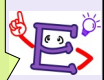


【学校】

- ・役割の確認や連携が行いやすくなる。
- ・進路実現に向けて身に付ける力や必要な支援が共有でき、一貫した指導・支援ができる。
- ・「個別の教育支援計画」の作成につなげるなどして、支援を切れ目なくつなげることができる。



小学校で保護者と共有されていた「個別の指導計画」が中学校でも共有されるよう、校区で引き継ぐ内容の確認がされています。



ある管理職の方から「中学校卒業までに身に付けさせる力やそのための手立てを、保護者と共有することで指導・支援の効果を高め、切れ目なく支援をつないでいくことができる。」と話がありました。保護者と指導・支援の方向性を確実に共有していくためには、設計図の内容を明確にしていくことが必要です。関係者とこの1年の取組を評価し、二つの計画の内容充実を図り、切れ目ない支援の実現に向けた取組を進めていきましょう。

社会教育
コーナー



鳥取市立高草中学校「中学生トークプログラム」

社会教育課の事業である中学生トークプログラムが、先日、高草中学校（2年生）で実施されました。中学生トークプログラムは、自分たちの地域で活躍する大人の多様な価値観を知ることを通して、社会への興味・関心を高め、将来に目を向け、今の自分に何ができるかを考えることをねらいとして実施しています。中学生、大学生、地域の大人がグループになり、働くことや自分の生き方などをテーマに、自由に話し合いました。

トークプログラムの様子

①アイスブレイクで緊張をほぐした後自己紹介をします。



②司会が全員にテーマを出題します。自分の考えを用紙にキーワードで書き司会の合図で一斉にオープンし、その後それぞれの考えを伝え合います。

③時間がきたら次のテーマへ。前後半でグループを入れ替え3テーマずつ話し合います。最後に振り返りをします。



【ジェスチャーゲーム！】
お題の正解数が多いチームの勝ちです。徐々に打ち解けていきます。

【総理大臣になったら何をしたい？】
中学生は、普段、学校や社会、日常生活に対して思っていることや感じていることを話していました。

【あなたにとって働くとは？】
「スキルアップのため」「生活のためにお金が必要」「誰かの役に立つため」など、様々な意見が出ました。

感想

(中学生)

- ・人前で話すことがこんなにも楽しかったのは初めてで、思っていることが話せた。
- ・普段、関わりの少ない大人の皆さんの意見を聞いて新鮮だったし、自分の視野が広がり、将来の選択肢が増えた。

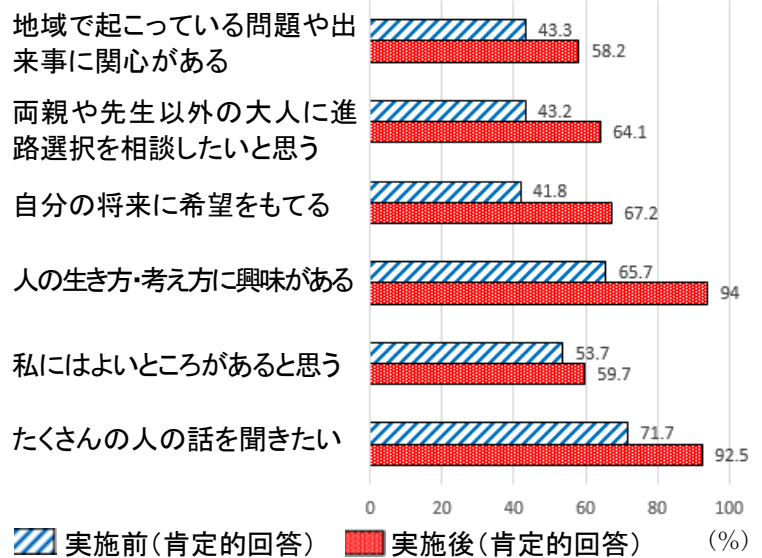
(大学生)

- ・夢や経験はみんな平等にあり、大人や大学生の話聞いて何か掴んでほしい。
- ・終始和やかな雰囲気に対話が進み、大人の方の意見に対して中学生が大きくリアクションしながら聴いている様子がみられ、学びの場になっていると実感した。

(大人)

- ・よく考え、頑張っている中学生の可能性と未来に、大きく期待することができた。
- ・中学生の思っていること、大学生の想いを聞き、私自身の刺激になった。

実施前後の気持ちの変化（アンケート結果より一部抜粋）



トークプログラムの実施後は、各項目で肯定的な回答が増えたことが分かります。

中学生トークプログラムの取組は、本年度、鳥取市立千代南中学校でも実施されました。どちらの学校でも、中学生にとっては、多様な価値観に出会うよい機会となりました。また、普段は関わりの少ない大人や大学生との意見交換を通して、将来に対して前向きな気持ちになり、自己肯定感も高まりました。大人や大学生にとっては、普段自分が考えていることや地域への思いを中学生と話し合うことで、学校教育への関心が深まりました。このように、中学生トークプログラムは、参加者それぞれにメリットのある取組となりました。